

本日の聖書箇所に記載されたイエスのたとえ話には、金持ちとラザロという人物が登場してきます。金持ちは、毎日ぜいたくに遊び暮らしており、ラザロは、金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと願うような貧しい境遇にありました。ところが、死後の世界では、その立場が逆転しています。金持ちは陰府でさいなまれ、炎のなかでもだえ苦しむことになり、ラザロは神の国の宴会の席に着くことになりました。そして、この二人の間には決して渡ることができない程の「大きな淵」があるのだと、イエスはたとえ話の中で示しています。

では、その「大きな淵」は何の違いによって生まれたものなのでしょうか。生前に徳を積んだかどうか、お金の振り回されず質素な暮らしをしていたかどうか、死後の境遇を分けるということなのでしょうか。そうではありません。たとえ話の中で、金持ちは、自分の兄弟たちが同じ目に遭わないように「悔い改める」（30 節）よう説得してくれと頼んでいますから、ラザロにあって金持ちになかったのは「悔い改め」であったということが分かります。聖書における「悔い改め」は、単に自己反省することではありません。神において自分を省み、神を信じて新たな命の道に歩み出そうとする方向転換を意味します。ラザロは、その貧しさの中で、自分の持てる力によって生きられる見通しが立てられない生活をしてきました。神の憐れみしか、彼が頼りにできるものはなかったと言えます。一方、金持ちは、その持てる財力によって、自分の力でのみ生きて行ける見通しのなかにあり、神の憐れみが必要であるという感覚はなかったと言えるでしょう。しかしやがて、この金持ちも陰府に苛まれ、炎にもだえ苦しむなかで、自分の力ではどうにもならない状況を味わい知ることになります。

とかく人間が人生を見通せるのには限りがあります。思うようにいかないのが人生です。そんな現実を生きている私たちに、イエスは神という存在へ思いを向けて生きると「悔い改め」を求めています。なぜなら、「神の思いは、人の思いにあらず」（イザヤ書 55 章 8～9 節）だからです。この聖書の言葉が、本当にそうだと思うためには、たとえ話の金持ちのように、いくつかの挫折を経験し、そこから、自分の思いの「浅はかさ」に気づくことがどうしても必要なのかもしれない。

神の思いと人の思いの間にもまた、あまりにも大きな淵があります。しかし、その隔たりこそが、思うようにならない人生を生きる私たちの希望であり、救いであると聖書は語ります。「人生の現実冷たいが、神の摂理はあたたかい」。そんな証を聞いたことがあります。

（文責：望月達朗牧師）

